



歩き旅

まごめ つまご 馬籠宿～妻籠宿

約 7.9 km

中山道ぎふ17宿とは?

江戸時代に整備された五街道の一つである中山道は、江戸と京都を結ぶ重要な街道で、全長135里32丁(約534km)に69の宿場が置かれました。そのうちの17宿、126.5kmが岐阜県的美濃地方を東西に横断しており、今も往時の面影を色濃く残しています。その土地の歴史や文化、隠れた魅力の発見を楽しむ街道観光は岐阜県の誇るべき観光資源であるとして、平成25年2月に「岐阜の宝もの」に認定されました。

馬籠宿

「木曾路は すべて山の中である」という有名な書き出しで始まる『夜明け前』は、島崎藤村の傑作で日本の近代文学を代表する小説として知られています。その舞台となったのが、藤村のふる里である馬籠宿です。馬籠の大黒屋の主人の日記を参考にしたこの作品の随所に、当時の馬籠宿や中山道の様子が描かれています。

藤村記念館

藤村の生家であり、馬籠宿の本陣・問屋・庄屋を兼ねる旧家の跡です。藤村の全ての作品、直筆原稿、周辺資料など約6,000点を所蔵・展示しています。藤村が幼年時代に学習していた「隠居所」のみ、当時の姿のまま残っています。
入館料:大人 500円 小・中学生 100円

大妻籠

妻籠宿保存地区の一部で、街道端に袖卯建を持つ出梁造りの民家が軒を並べます。

脇本陣史料館

『夜明け前』の榎田屋のモデル、八幡屋(蜂谷家)跡に建つ史料館で、当時の生活・文化を紹介する史料が展示されています。蜂谷家に伝わる鎧・生活道具などの遺品、古文書の展示のほか、大名が利用した上段の間を忠実に復元しており、入口には、俳人山口誓子の句碑があります。
入館料:大人300円 小・中学生100円

一石栃白木番所跡

最初下り谷に設置された妻籠宿の白木改番所跡(木材・木工品などの出荷取締りを行うところ)は、後に馬籠峠に近い一石栃に移され、明治2年(1869)まで、木曾五木をはじめとする伐採禁止木の出荷統制を行ってきました。

島崎藤村の小説

『夜明け前』〈あらすじ〉

Topics

主人公の半蔵は、馬籠宿で17代続いた本陣・庄屋の当主だが、平田派の国学に心酔。やがて明治維新を迎え、待ち望んだ王政復古の実現を信じて歓喜する。しかし現実には、西洋文化を意識した文明開化と政府による民へのさらなる圧迫などにより、憤ましく生きる人々を苦しめる。時世に何度も裏切られ、やがては絶望のあまり心を病んだ半蔵。「わたしはおてんとうさまも見ずに死ぬ」と言い残し、閉じ込められた座敷牢で56歳の生涯を終えたのだった。



中山道は、山深い木曾路を通ることから木曾街道ともよばれていました。江戸から数えて42番目の宿場となる妻籠宿は、中山道と伊那道が交差する交通の要所として古くから賑わっていたそうです。明治になって、鉄道や大きな道路が造られると宿場は衰退しましたが、江戸時代の宿場の姿を残す町並みを活かそうと全国に先駆けて町並保存運動が起こりました。妻籠の人たちは町並みを守るために家や土地を「売らない・貸さない・壊さない」という三原則をつくって、ここで生活しながら江戸時代の町並みという財産を後世に残し伝えています。